

平成29年度 研究部活動報告

◎森 顕子 猪又 匠
上園 悦史 大熊 誠二
小岩 大

(◎：研究部主任)

I 本年度の研究体制

1 本年度の取り組み

本年度は、竹早中学校独自の研究と竹早幼稚園・竹早小学校・竹早中学校の幼小中連携研究（以下、連携研究）の2つに取り組んだ。

(1) 中学校の研究

1) 校内研究会

7年前から中学校だけで行う「校内研究会」を実施している。連携研究の一環として、幼小中の教員がそれぞれの授業を見合う「幼小中連携授業研究会」とは別に、中学校教員のみで行われる授業研究会である。教科の枠を越えて、授業について語り合い、互いの授業観、教育観を交流することを通して、各教員が研鑽を積むことを目的としている。本研究会は、「地域の研究拠点校」及び「中一中連携の一環」としても位置づいており、文京区の公立中学校にも公開している。

2) 「中一中連携」の取り組み

東京学芸大学が定めた「年度計画」の「教育に関する目標を達成するための措置」では、「附属学校と地域との連携体制について検討する」ことが挙げられている。

それを踏まえ、本校と文京区の公立中学校による「中一中連携」の活動を模索してきた。その方策の1つとして、6年前から文京区教育研究会（以下、区教研）にオブザーバーとして参加してきた。今年度も、いくつかの教科で交流を行うことができた。一方で、交流が進展しない教科もあった。こうした状況を少しずつ改善し、文京区、さらには東京都を視野に積極的に交流の輪を広げることができればと考えている。

(2) 竹早地区連携研究

1) 研究体制

竹早地区連携研究では、平成24年度の幼小中連携カリキュラム（以下、連携カリキュラム）の一応の完成を受け、翌平成25年度から第6期研究として「幼・小・中連携カリキュラムの検証」をテーマに研究を進めた。昨年度、第6期研究のまとめとして、主体性の育成を意図した連携研究及び実践の成果から主体性を育む「連携」の視点をまとめた。

今年度は、「学びを深める場をつくる」という新たなテーマの下、第7期研究をスタートさせた。

その主な運営は、これまでと同様、幼小中3校種の連携委員12名が担い、中学校では研究部員全員が連携委員を兼務した。

第7期の連携研究の組織は、大きく実践研究部会と理論研究部会に分かれ、教員の負担軽減や時間的ゆとりを考慮したこれまでの流れを受け、実践研究部会を全教員で取り組み、理論研究部会を連携委員が担うという形にした^{註1)}。これにより、連携委員は、例年同様、理論研究部会と実践研究部会の両方に所属するため、その負担が大きくなるものの、他の教員の負担が軽減されるようになった。また、本年度は、連携研究会の回数を年間12回にし、昨年度と比べると1回少なくなっている。これは、昨年度、第7期研究のテーマを議論する場を多く設定したことを受けての配慮である。これは、闇雲に回数を多くすればよいのではなく、ときには負担を軽減し、少しでも時間的余裕を教員にもたせることが、結果として連携研究の持続可能性と発展につながるという、バランスを大切に考えた考えに基づいていることで

ある。ただ一方で、教科領域によっては、指導案の検討等、連携研究会の機会だけで足りない場合が出てくる。その場合、各教科領域で時間を決め、議論する場を設けるようにしている。

2) 理論研究部会

理論研究部会は、学びを深める場分科会と発達分科会に分けられる。連携委員 11 名のうち、理論分科会に 7 名、発達分科会に 4 名が所属した。

学びを深める場分科会では、第 7 期研究のキーワード「学びを深める場」の意味を検討した。具体的には、まずその前提にある「学び」「学びを深める」の意味を、竹早の子どもの実態や竹早地区の教員の考えを基本に、国立教育政策研究所が提唱する「深い学び」を検討しながら模索した。

発達研究分科会は、幼小中連携カリキュラムの基礎理論として位置づけてきた「主体性が育まれた姿から見る子どものたちの変容のステージステップ（以下、ステージステップ）」の見直しに取り組んだ。この目的は、学びを深める場における子どもの姿には主体性の発揮がみられるであろうという仮説の下、「学びを深める」という観点からステージステップを見直すことにより、「学びを深める場をつくる」際の指針を得ることである。

今年度は、その基礎作業として、ステージステップを見直し、幼小中全体を貫く「めざす子ども像」は明示してあるが、「子どもを見取る視点」や「手立て」については未整理で、全体で共有された統一的な視点がないことを確認した。また、他校の連携研究の検討も行い、子どもの姿が存分に語られている研究は確認できるものの、本地区と同様、異校種を貫く「子どもを見取る視点」や「手立て」を主張している研究は確認できなかった。

3) 実践研究部会

実践研究部会は、第 6 期研究までの幼小接続分科会と小中接続分科会の校種間の接続に視点を置いた分科会を廃し、また小中接続分科会に設定されていた言語・社会・自然・表現・健康・人間の 6 グループも取りやめた。そして、幼稚園、国

語、社会、算数数学、理科、音楽、図工美術、体育、養護、技術・家庭、外国語・人間の教科領域による 12 の分科会に再編した。これは、「学びを深める」研究テーマからみて、その基本は各教科領域の実践にあるという考えから、まずは比較的に取り組みやすい教科領域単位での研究から着手し、研究を深めることが、第 7 期研究の土台づくりにつながると考えたからである。

中学校の各教員は自分の教科に所属するが、人間グループ（道徳・特活・総合）のみ、教務部、指導部から各 1 名、研究部から学級担任をもつ 3 名の計 5 名が所属した。なお、この 5 名は、自分の教科と人間グループの兼務になる。

今年度の取り組みは、第 7 期研究初年度ということもあり、各教科領域で「「学び」や「学びを深める」とは何か」について議論した。そして、夏休みの連携研究会（7 月 24 日、8 月 30 日実施）を利用して、それらを共有し、教科領域の特性やそれに基づく差異を認識することができた。

この一方で、本年度は、10 月の火災発生の影響で公開研究会を実施できなかったこともあり、これらの議論の成果を実践の形に具現化することが十分にできなかった。来年度は、このことに取り組む、実践と検証の繰り返しを通して「学び」や「学びを深める」に関する考えをさらに深めることが課題である。

2 研究部分掌

本年度の研究部の分掌は、以下の通りである。

- 附属・研究推進委員会等渉外 (森)
- 公開・校内研究会推進 (上園)
- 研究紀要 (大熊)
- 研究資料 (猪又)
- 予算 (森) (小岩)
- 幼小中連携委員会 (森) (猪又)
(上園) (大熊)
(小岩)
- 総合活動 (上園) (大熊)
(小岩)
- HATO (上園) (猪又)

○CCSS (森)(大熊)
(小岩)

以上の分掌で滞りなく活動することができた。

II 研究部の活動経過と内容

1 本年度の研究活動経過

(1) 研究部会・校内研究会

研究部活動【○】の内容と校内授業研究会【◎】の実際の活動は、次のようである。

- 3月8日 第1回研究部会
係分担, 年間計画, 連携研究検討
- 4月12日 第2回研究部会
今年度の活動方針, 連携研究検討
- 5月10日 第3回研究部会
幼小中連携授業研究会の検討
- 6月7日 第4回研究部会
幼小中連携授業研究会の運営
- 6月21日 第5回研究部会
6月の連携授業研の反省
- 7月12日 第6回研究部会
公開研究会の公開授業について
- 9月6日 第7回研究部会
事前研の授業と時程の検討
- 9月20日 第8回研究部会
事前研究会の内容の詳細検討
- 10月11日 第9回研究部会
火災の影響により中止
- 11月1日 第10回研究部会
公開研中止に伴う今後の対応
- 11月29日 第11回研究部会
校内授業研の内容の検討
- 1月17日 第12回研究部会
校内授業研の運営等の詳細の確認
- ◎ 1月19日 校内授業研究会
第2学年 理科研究授業
- 2月1日 第13回研究部会
校内研究会の反省
- 2月22日 第14回研究部会
来年度の連携研究の方向性確認

○ 3月8日 第15回研究部会
今年度の反省, 機器購入計画

(2) 「中一中連携」の実践

5年前より, 文京区の区中研にオブザーバーとして参加できるようになった。依然, 教科や領域によって差があるものの, 着実に活動内容が充実してきている。今後もさらに「中一中連携」を深化させるために, 次のことを積極的に行ってきたい。

- ①授業研究会のオープン化&公開研への誘い
- ②区教研への会場提供と参加
- ③研究会等への講師派遣

2 幼小中連携研究活動経過

(1) 連携委員会

竹早地区連携研究について, 幼小中の連携委員12名と各校種の管理職で構成する連携委員会と全教員参加の連携研究会を中心に活動してきた。連携委員会は多くの場合, 連携研究会の事前に行われ, そこで連携研究会の運営内容が協議され, 決められている。

連携委員会の活動は, 以下の通りである。

- 4月7日 第1回連携委員会
年間計画提案と今年度の運営・方針
- 4月25日 第2回連携委員会
公開研の提案内容与时程について
- 5月9日 第3回連携委員会
理論面の検討
- 6月6日 第4回連携委員会
6月19日連携授業研究会について
- 7月11日 第5回連携委員会
7月24日連携研究会運営, 2次案内の内容の検討
- 8月29日 第6回連携委員会
公開研の要項について
- 8月30日 連携研究会運営
- 9月12日 第7回連携委員会

- 公開研の指導案の形式の検討
- 公開研第2次案内の内容の検討
- 10月12日 第8回連携委員会
公開研究会の開催について
- 11月10日 第9回連携委員会
公開研究会の中止の対応について
- 11月22日 第10回連携委員会
理論面の検討について
- 2月13日 第11回連携委員会
今年度の連携研究の反省、
連携紀要の全体提案の検討

(2) 連携研究会・連携授業研究会

連携委員会を踏まえて連携研究会を開催し、連携研究の方向性などを全教員で確認していくボトムアップでの運営が竹早地区の連携研究の特徴である。

連携研究会【○】の内容と、授業研究会及び公開研究会等【◎】の活動は、以下の通りである。

- 4月13日 第1回連携研究会
組織発表
今年度の活動運営・研究の方向性
- 4月27日 第2回連携研究会

- 6月の連携授業研究会について
- 5月23日 第3回連携研究会
幼小中連携授業研究会に向けて
- ◎6月16日 第4回連携研究会
幼小中連携授業研究会
- 7月24日 第5回連携研究会
理論面の検討
- 8月29日 必要な分科会（半日）
- 8月30日 第6回連携研究会
公開研の授業者・二次案内について
理論面の検討（全員全日）
- 9月28日 第7回連携研究会
公開研当日の指導案の形式
- 10月13日 臨時連携研究会
火災の影響への対応について
- 11月14日 第8回連携研究会
連携紀要について
- 12月4日 第9回連携研究会
理論面の検討
- 2月20日 第10回連携研究会
今年度の反省と次年度の方向性

以上のように、火災の影響もあったが、充実した活動を行うことができた。また、次年度に向けた前向きな議論もなされた。

(表1) 今年度の授業研究一覧

日時	教科	授業者	講師	教科	授業者	講師
6月16日	国語	堀内 泰	中村 和弘 (東京学芸大学)	音楽	中野 未穂	猶原 和子 (江戸川大学)
	数学	小野田啓子	中村 光一 (東京学芸大学)	家庭	酒井やよい	仙波 圭子 (女子栄養大学)
	社会	石戸谷 浩美	大澤 克美 (東京学芸大学)	美術	山田 猛	小林 貴史 (東京造形大学)
	道徳	菊地 圭子	松尾 直博 (東京学芸大学)			
1月19日	理科	勝岡 幸雄				

3 授業研究会

(1) 校内研究会

校内研究会は、先述したように、中学校のみで行

われる。具体的には、中学校教員全員で一つの授業を観察し、それについて協議する「授業研究会」を行う。校内研究会は、基本的には個人の研究成果を

発表する場として位置づけており、授業学年及びテーマは、授業者の裁量に委ねられている。また、指導助言者を招聘するための予算も確保している。今年度は、1月19日に実施し、第2学年の理科の授業について議論した。

連携の授業研究会と並行して校内研究会を行うため、教員の負担もあるが、その意義を大切にし、今後も内容を工夫しながら継続していく方針である。

(2) 連携授業研究会

今年度は、幼小中連携授業研究会を、6月16日に表1の内容で行った。この授業研究会の目的は、「学びを深める場をつくる」に関する各教科領域の考えを、実践を通して検証することであり、これを通して「学びを深める場をつくる」に関する考えを深め、研究の方向性が議論された。

Ⅲ 研究の成果と課題

1 研究部の活動から

成果として、まず校内研究会を実施し、教科の枠を越えて授業について議論できたことがあげられる。連携に関する授業研究と並行しての実施は負担もあるが、日ごろ他教科の授業を参観し議論する機会がないため、大切な機会として、これからも継続していきたい。この取り組みは、本校教員の授業観、教育観の共有や相互啓発の機会となり、授業力の向上及び本校生徒へのよりよい教育活動につながると考えている。

一方、「中一・中連携」の一環として取り組んでいる文京区の区中研への参加と交流は、着実に交流が深まっている教科がある中で、交流が衰退しつつある教科も出てきている。これまでに培ってきた交流の芽を絶やさぬよう、今後も積極的に交流を図っていきたい。

最後に、予算的に厳しい現状の中で、研究を進めるために必要な機器を購入し、研究環境を整備することができたことも成果である。引き続き、ICT活用の流れを受けての機器の購入といった環境整備が、本校教員の授業力向上に寄与し、本校の教育の幅と深まりにつながることが期待している。

2 連携研究の活動から

本年度の成果は、第7期初年度として「学びを深める場をつくる」について各教員が考えを深めることができたことがあげられる。火災の影響により公開研究会が実施できなかったこともあり、依然、それらについて何らかの知見を得る段階にまで至っていないが、こうした試行錯誤した時期は、今後の研究の土台につながるものと考えている。

学びを深める場分科会では、先述したように、「学びを深める場をつくる」を追究する上でのキーワード「学び」と「学びを深める」について、その意味を検討した。依然、研究途上にあり、明確な知見を得るまでに至っていないのが現状だが、「学びとは何か」「学びを深めるとはどういうことか」について活発に意見交換ができ、個々の教員が考えを深めることができたことが今年度の成果である。公開研究会が中止になり、実証的考察が難しい状況ではあったが、こうした試行錯誤した経験が、次年度以降の研究の土台になると確信している。

来年度は、これを基礎に事例研究的に、実践研究部会の実践を検討しながら「学び」や「学びを深める」について研究を進めていくことが課題である。

発達研究分科会では、ステージステップの見直しを行い、幼小中全体を貫く「めざす子ども像」は明示してある一方で、「子どもを見取る視点」や「手立て」については統一的な視点がないことを確認した。また、他校の連携研究についても、同様に異校種を貫く「子どもを見取る視点」や「手立て」の指摘がみられないことを確認した。今年度の成果は、こうした先行研究の実態を明らかにしたことであり、来年度は、これを踏まえて理論研究分科会と連携を取りながら、ステージステップの表の分析をさらに進めることが課題である。

実践研究部会では、「学び」や「学びを深める」について教科領域ごとにその特性を踏まえた議論を行い、それぞれで考えを深めることができた。この成果の一方で、公開研究会の中止に伴い、深めた考えを実践の形で具現化し、その検証を行うところまでは至らなかった。来年度は、この点を

踏まえ、引き続き「学び」や「学びを深める」について議論していくとともに、それを実践し、実証的に考察して示唆を得ることが課題である。

3. 成果と課題

第7期の初年度として、依然試行錯誤の段階だが、理論部会と実践部会の両方向からの活発な議論により徐々に研究の焦点が絞れてきている。遅々とした歩みだが、着実に前進できていることが本年度の成果といえる。

一方で、研究が少しずつ深まってきたからこそ、研究の目標、目指す結論の曖昧さが問題として浮かんできた。今一度、これまでの竹早地区の研究

の流れや社会的要請及び教育界の流れ、そして竹早地区の子どもの実態を振り返り、第7期研究で何をめざすのかを明確にし、竹早地区の教員全体で共有することが喫緊の課題である。

課題は山積だが、研究部中心に研究をリードし、特色ある方向性を探り、発信していくこと、そして何よりも竹早地区の子どもたちが生き生きと学びに向かえるように努力していきたい。今後も、連携研究の先駆けとしての自覚をもち、我々の教育・研究内容に対する期待に応えられるよう、より実践的かつ一般性の高い成果の提供に努めていく。

(文責 森 顕子)

【参考資料】

注1) 平成29年度の連携研究組織図を示す。

〔竹早地区連携研究全体図〕

